

## 職員が書いた養護施設の小説

## —史料としての特徴について—

○ 京都大学大学院 野崎祐人 (009756)

キーワード：養護施設、歴史、小説

## 1. 研究目的

1947年の児童福祉法制定によってその名を与えられてから1997年の児童福祉法改正によって「児童養護施設」に名称変更されるまでの「養護施設」の歴史は、一言でいえば「戦争孤児の時代から児童虐待の時代へ」とまとめられる。この間の養護施設における養育実践の歴史を学ぶときに、何を手がかりとすることができるだろうか。政策文書、全国社会福祉協議会養護施設協議会の機関誌『児童養護』（1970年～）や『養護施設30年』（1978年）、全国養護問題研究会の研究誌である『そだちあう仲間』（1976年～）『日本の養護——福祉と教育の統一を目指して』（1981年～85年）『日本の児童問題』（1986年～1996年）、施設関係者によって書かれた論文、施設に残された養育記録などが考えられる。これまでの養護施設や社会的養護に関する歴史研究は、それぞれ相異なる種類の史料を用いることによって、様々な養護施設の歴史を描いてきたといえる（土屋2014、吉田2018など）。

そのなかで、養護施設の歴史を学ぶ手がかりとしてこれまであまり注目されてこなかったのが、施設職員によって書かれた小説である。養護施設の現場で養育実践に携わってきた人びとのなかには、論文や実践報告とは異なる小説という媒体（メディア）に乗せて、自らの実践について語った人物がいた。それらの作品は養護施設における子どもの養育のどのような側面を、どのような語りを用いながら伝えているのだろうか。

## 2. 研究の視点および方法

本報告で主にとりあげるのは、2人の施設職員によって書かれた小説である。

1人目は、自らも孤児としての放浪生活を経験したのち、戦後に戦争孤児の施設「有隣療護院」の職員として働き、その経験をもとに戦争孤児をテーマとした小説を発表し続けた西村滋である。本報告では、特に彼が施設の職員として働いていたころの様子を回顧した『それぞれの富士——戦争とふたりの少年』（主婦の友社、1986年）、『戦火をくぐった唄——三日月センセイと三人の子と』（講談社、2009年）等の小説を主に扱う。

2人目は、東京都の小山児童学園で保母をしていた神田ふみよである。神田は、『そだちあう仲間』に連載していた小説を『それぞれの花をいだいて——養護施設の少女たち』（ミネルヴァ書房、1986年）にまとめる。この作品は、施設の保母として働いている自分自身の「分身」としての施設職員が、子どもたちとのかかわりのなかで成長していく様子を描いたものである。

2人の小説には、「私」として一人称の語り手として語るのではなく、三人称の語り手に語らせつつも、小説中に自らをモデルとした人物を登場させ、自らの施設職員としての養育経験を描いていく、という小説技法上の共通点がある。

小説を手がかりとして養護施設においてどのような養育が行われてきたのかを明らかにすることを、本報告の主たる目的とするわけではない。むしろ、小説という形式が養護施設の歴史をどのようなかたちで伝えているのか、論文や実践報告等の史料を読むときと施設職員によって書かれた小説を読むときとで、養護施設の歴史の学び方にどのような違いがあるのか、を考えてみたい。

### 3. 倫理的配慮

本報告は「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」を遵守するものである。出版されている書籍を用いるが、現代において差別的表現と認識される言葉についても歴史的叙述であることを踏まえ原文のまま引用する。

### 4. 研究結果

西村滋による施設における戦争孤児養育を扱った小説に通底しているのは、小説中に登場する1人1人の戦争孤児たちを必ず過去・現在・未来を持った存在として語る方法である。(小説世界における)現在の子どもの様子を描写する際に、子どもたちの過去の家族生活や戦争経験にかんする語りを挿入したり、戦争孤児とかがわった時点から小説が書かれた現在までの期間における戦争孤児たちの「その後」に言及するといった語りの方が頻繁に用いられていた。このような長い生活史(物語)を持った存在としての戦争孤児の姿は、他の戦争孤児に関する史料を眺めていてもなかなか出会うことのないものである。

神田ふみよの小説にみられたのは、同時代の養護論や専門職養成課程のうちに用いられていた語彙・考え方から距離をとるような語り口であった。神田は当時、『児童養護』や『そだちあう仲間』といった養護施設関連の機関誌・研究誌上で積極的に実践報告や実践理論の紹介を行っていたが、それらではあまり語ることのない抽象化・理論化されない子どもたちとの養育のあり方を、小説という形式に乗せて語っていたようである。

### 5. 考察

語り手の設定や小説世界中を流れる時間といったその形式にユニークな特徴によって、小説は養護施設を他の媒体とは異なるやり方で語っていた。このような媒体(メディア)自体の特徴に注目しつつ読むことで、小説も養護施設の実践の歴史を学ぶための手がかりとすることができるのではないだろうか。

### 文献

土屋敦(2014)『はじき出された子どもたち——社会的養護児童と「家庭」概念の歴史社会学』勁草書房。

吉田幸恵(2018)『社会的養護の歴史的変遷——制度・政策・展望』ミネルヴァ書房。